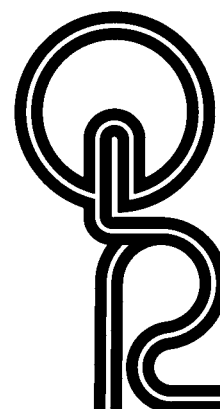


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 29 No.5, 2022



約 70 万年前の小型の原人 (*Homo floresiensis* あるいはその祖先と思われる) の顎と歯が発見されたソア盆地のマタメンゲ遺跡(インドネシアのフローレス島:2013 年 海部陽介撮影)

Vol. 29 No. 5

October 1, 2022

2022 年大会開催報告 2	INQUA2023 若手派遣支援について ..11
2022 年大会若手・学生発表賞受賞者 報告 6	紙碑 12
学会賞等受賞者の言葉 7	2023 年大会案内 (第 1 報) 13
第四紀通信の発行回数の変更と第四紀 研究の発行月変更のお知らせ11	評議員会議事録 13
役員選挙に向けての領域の変更手続き と 2022 年度会費納入のお願い 11	総会議事録 14
	会員消息 26
	執行部会議事録 28

◆日本第四紀学会 2022 年大会報告

2019 年末からの新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の発生・蔓延で、日本第四紀学会では 2020・2021 年の大会はオンライン形式での開催となった。新型コロナワクチンの接種が進み、COVID-19 の第 7 波の期間中だが、行動制限は出ていないので、8 月 26～28 日に 2022 年大会を静岡県地震防災センターにおいて対面形式で開催した。今後の感染症の下での学会活動への参考のため、通常の対面での大会の運営と異なる内容を略述する。

COVID-19 の状況をもとに (図 1)、大会の開催形式を 8 月 22 日までに決定することとし、行動制限が出されていないので、予定通りに対面実施とした。

本大会の参加は会員限定とし、かつ事前登録制を採用した。会員限定としたのは、非会員の場合、個人情報の管理が煩雑だからである。

事前登録制は、オンライン委員会の作成した Google Forms を用いて、参加者数の把握、連絡、ネームプレート作成に使った。参加者は 3 日間で延べ 82 名である。参加者のネームプレートの印刷とネームホルダーに入れる作業は北村が行った。事前にネームプレートホルダーを作成したのは、受付場所の通過時間を大幅に短縮するとともに、ネームプレートの記載時の筆記具や机などへの接触をなくすためである。参加者の氏名の入った領収書も作成し、大会実行委員長の印を押した。また、参加者の氏名はないが印のある領収書も作成した。

参加費は 1,000 円としたが、これは釣銭のやりとりをできるだけ少なくするためである。COVID-19 対策のため、口頭発表者には各自の PC を接続いただき (図 2)、懇親会は無く、企業ブースも無く、休憩室での飲食の提供も無しとした。昼

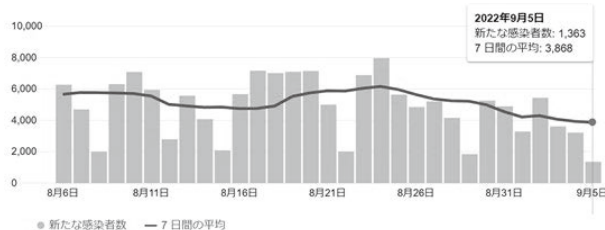


図 1 静岡市ホームページより 9 月 7 日ダウンロード

食は大研修室でとり、弁当殻は持ち帰っていた。総会・授賞式はハイブリットで行った。

オンライン開催となった場合に備えて、ポスター発表者には、ポスターのデータを 8 月 19 日までにアップロードすることとした。また、発表予定者が COVID-19 の発症者および濃厚接触者となり、かつ発表代理を立てられない場合で、本大会が現地対面で実施することとなった際には、次の措置をとった。

8 月 25 日 (木) 12 時までに、発表動画ファイル (MP4 ファイル、250MB 以下) を提出した発表者については、口頭発表者の場合、予定の発表時刻に講演会場のスクリーンに動画を流し、ポスター発表者の場合、ポスターコア時間に 15 分間、講演会場のスクリーンに動画を流す。ハイブリットとはせず、会場の聴衆からの質問はなし。賞の審査に関しては、対面発表または上記手続きの発表動画で審査としたが、利用者はなかった。

ポスター会場は、密を防ぐため、広くとり、見に来た会員は 40～50 人だったので、それほど密な状態にはならなかった (図 3)。大会後、本大会期間中に COVID-19 に感染した可能性のある事例は報告されていない。

大会実行委員会 (北村晃寿、中西利典、西岡祐一郎)



図 2 一般研究発表の様子 (静岡県地震防災センター・ないふるホール)



図 3 ポスター会場の様子 (静岡県地震防災センター・多目的スペース)

◆日本第四紀学会 2022 年大会概要

主催 日本第四紀学会 共催 ふじのくに地球環境史ミュージアム
 開催場所 静岡県地震防災センター 〒420-0042 静岡市葵区駒形通5丁目9番1号
 開催日程 8月26日(金) 一般研究発表(口頭及びポスター)

受付 9:00～
 一般講演 9:15～11:45
 ポスターショートトーク 11:45～12:10
 ポスターコアタイム 13:00～14:30
 一般講演 14:30～16:45

8月27日(土) 一般研究発表(口頭及びポスター) 総会

受付 9:00～
 一般講演 9:15～11:45
 ポスターショートトーク 11:45～12:00
 ポスターコアタイム 12:45～13:45
 一般講演 13:45～14:45
 総会 15:00～16:50

8月28日(日) シンポジウム

受付 9:00～
 シンポジウム 9:15～12:45 ないふるホール

巡検 Aコース：ふじのくに地球環境史ミュージアム Bコース：熱海市伊豆山地区土砂災害
 大会実行委員会および行事委員会

大会実行委員長：北村晃寿(静岡大)

実行委員：中西利典、西岡佑一郎(以上、ふじのくに地球環境史ミュージアム)

行事委員会：工藤雄一郎(学習院女子大・委員長)、池原 実(高知大)、箱崎真隆(歴博)、奥野 充(大阪公立大)、目代邦康(東北学院大)

プログラム

●8月26日

口頭発表 AM1 座長 青木かおり

- O-01 北村晃寿……熱海土石流に関する地球科学的研究
- O-02 山田和芳・鹿島 薫・瀬戸浩二・香月興太・辻本 彰・福本 侑・藤木利之……浚渫くぼ地堆積物を用いた秋田県八郎瀨調整池における近年の環境変化
- O-03 田村 亨・納谷友規・中島 礼・清家弘治・岡崎浩子・中里裕臣・奥野淳一……関東平野東縁における下総層群のルミネッセンス年代
- O-04 佐藤俊文……房総半島中西部におけるステージ 5e の旧汀線を探る

口頭発表 AM2 座長 山田和芳

- O-05 青木かおり・小林 淳・村田昌則・宮入陽介・横山祐典・鈴木毅彦……房総沖掘削コア C9010E のテフラ層序—海底火山大室ダシ起源と推定される 3 万年前のテフラの発見—
- O-07 金子純也・山田和芳・藤木利之・瀬戸浩二・香月興太・辻本 彰・鹿島 薫……駿府城堀の水環境の現在地—水質と堆積物コアによる検討— (★)
- O-08 中西 諒・芦 寿一郎・宮入陽介・横山祐典……北海道日高地域において復元された完新世の古海水準・堆積環境変化とイベント層の形成・保存に与える影響 (★)

口頭発表 PM1 座長 近藤玲介

- O-09 根来湧輝・田村 亨・澤井祐紀・谷川晃一郎・嶋田侑真・岡田里奈……北海道霧多布湿原における地震性地殻変動に関連した浜堤の堆積構造と年代 (★)
- O-10 館野宏彰……臨海扇状地における河成段丘の形成プロセス—浜松平野を例として— (★)
- O-11 渡辺 樹・石村大輔・鈴木毅彦……山上湿地堆積物中でのクリプトテフラ検出に基づく高解像テフラ編年の構築—関東山地の茶屋池湿原・野々海湿原における MIS6 以降のテフラ層序— (★)
- O-12 根本夏林・横山祐典・Stephen Obrochta・山本真也・宮入陽介・中村淳路・Lamair Laura・Hubert-Ferrari Aurélia, Heyvaert Vanessa・De Batist Marc・藤原 治・theQuakeRecNankai

Team……本栖湖における過去 8000 年間のダスト輸送履歴および気候変動との関連 (★)

口頭発表 PM2 座長 工藤雄一郎

- O-13 小森康太郎・清家弘治・田村 亨……残存 OSL から読み取る九十九里浜沿岸域の土砂移動 (★)
- O-14 常岡 廉・横山祐典・太田耕輔・宮入陽介……表層泥炭の放射性炭素および放射性セシウム濃度に基づく高時間分解能年代測定 (★)
- O-15 酒井恵祐・中西利典・藤木利之・七山 太・大串健一……北海道東部, 春採湖で得られた堆積物を用いた縄文海進期の花粉分析 (★)

● 8月27日

口頭発表 AM1 座長 横山祐典

- O-16 中西利典・北村晃寿・石山達也・堀 和明・松多信尚・北川浩之・ホン ワン……駿河湾沿岸における放射性炭素の海洋リザーバー効果
- O-17 福與直人・小田啓邦・横山祐典・Geoffrey Clark・山本裕二……トンガ王国の鍾乳石の岩石磁気学的手法による噴火履歴復元の可能性 (☆)
- O-18 山田圭太郎・石村大輔・後藤和久……深層学習を用いた沿岸巨礫のマッピング (☆)
- O-19 嶋田侑眞・澤井祐紀・松本 弾・谷川晃一朗・伊藤一充・田村 亨・行谷佑一・宍倉正展・藤野滋弘……三重県南部の沿岸湖沼における過去 3000 年間の海水侵入の履歴 (☆)

口頭発表 AM2 座長 宮入陽介

- O-20 里口保文・林 竜馬・加 三千宣・芳賀裕樹……琵琶湖南湖の泥質堆積物の堆積速度
- O-21 香川 淳・吉田 剛……2022 年トンガ火山噴火によって発生した「気圧波」・「津波」に伴う地下水位変動
- O-22 藤木利之・金子純也・山田和芳・鹿島 薫・瀬戸浩二・香月興太・辻本 彰……岡山城堀堆積物に記録された過去 100 年間の都市環境変遷
- O-23 石村大輔・平峰玲緒奈・山田素子・中村義也……福徳岡ノ場 2021 年噴火による漂流軽石の形状の特徴
- O-24 横山祐典・タン エバン・尾崎達也……最終間氷期および MIS5e の海岸線の日本における分布について

口頭発表 PM1 座長 藤原 治

- O-25 宮入陽介・横山祐典・永田 俊……耳石の段階融解炭素 14 分析を用いた駿河湾魚類の棲息環境の推定
- O-26 苅谷愛彦……赤石山脈東縁とその周辺の山地における大規模斜面崩壊の編年
- O-27 澤井祐紀・百原 新・伊藤一充・松本 弾・嶋田侑眞……静岡県浮島ヶ原において復元された過去 5000 年間の沈水イベント
- O-28 白井正明・宇津川喬子……安倍川上流大谷崩の崩壊により形成されたハイパーコンセントレイテッド流堆積物

ポスター発表

- P-01 佐藤俊文……房総半島木更津台地上端部域の層序・地形検討
- P-02 横尾健人・田村 亨……ルミネッセンス特性を用いた泥粒子の供給源推定 (★)
- P-03 青島 晃・宇都宮 權・馬淵彩花・吉田和佳奈・樽松宏征……静岡県遠州灘海岸で見られる漂着軽石の分布と特徴
- P-04 塚原柚子・小形 学・川村 淳・菅野瑞穂・西山成哲・末岡 茂・中西利典・小松哲也……穿入蛇行河川の旧流路地形・堆積物に基づく下刻速度の推定……赤石山脈南部, 大井川の事例
- P-05 坂下 渉・横山祐典・Chang-Chin Wang・宮原ひろ子・阿瀬貴博・大山幹成・米延仁志……東北地方で採取されたスギのセルロース炭素同位体比から復元した日照率とインド洋ダイポールモードおよびアリューシャン低気圧との関係 (☆)
- P-06 林 尚輝・井上 淳……植物珪酸体群集組成に基づく更新世末期の河内平野中央部の植生復元 (☆)
- P-07 太田耕輔・藤原 治・Stephen Obrochta・宮入陽介・横山祐典……静岡県相良低地のコア試料の貝化石・元素分析結果が示す完新世中期の環境変化 (★)
- P-08 尾田宗一郎・ステューブン・オブラクタ・藤原 治・横山祐典・宮入陽介・畠山義矢……千葉県房総半島東部夷隅川河口低地における放射性炭素年代測定とオーバーウォッシュによる環境変化 (★)

P-09 近藤玲介・植村杏太・高場智博・宮入陽介・横山祐典・坂本竜彦……福江島における砂丘の pIRIR 年代測定

P-10 平林頌子・石沢成美・宮入陽介・阿瀬貴博・横山祐典……U/Th 年代測定および ^{14}C 年代測定による熊本県球泉洞の石筍の年代決定と DCF 変化 (☆)

★ 学生発表賞エントリー ☆ 若手発表賞エントリー

● 8月28日

シンポジウム「伊豆衝突帯とその隣接地域における大規模自然災害」

趣旨説明 北村晃寿

S-01 三井雄太……宇宙から見た伊豆半島・富士山周辺の地殻変動

S-02 石橋秀巳……富士山のケイ長質マグマだまり

S-03 藤原 治……南海トラフ東部の巨大地震・津波の長期予測の現状と課題

S-04 今泉文寿……静岡県(あいぞめ)の土石流災害—土石流発生メカニズムから考える—
質疑応答

◆日本第四紀学会 2022 年大会巡検報告 (B コース：熱海市伊豆山地区土砂災害)

高橋尚志 (東北大学災害科学国際研究所)

日本第四紀学会 2022 年大会の巡検の B コースは、2021 年 7 月 3 日に発生した「熱海市伊豆山地区土砂災害」をテーマとして、静岡大学の北村晃寿氏の案内で実施された。地域住民の状況に配慮して参加者の定員は 10 名とされ、申し込んだ 10 名全員が参加した。8 月 28 日 15 時 10 分に JR 熱海駅改札前にて集合し、徒歩で伊豆山地区へと移動して土砂災害の被災地を訪れた。

巡検では、北村氏が報告した発災直後の写真資料(北村, 2022)と現在の状況を見比べながら被災地を巡った。巡検当時は土石流の堆積土砂や瓦礫の多くは撤去され、復旧が進みつつあったが、被災家屋や家屋の基礎などはまだ一部残されており、発災当時の状況や被害範囲を伺い知ることができた。

最初に伊豆山地区を流れる逢初川(あいぞめ)の下流域を訪れた。下流域の逢初川は、深い谷となって掘りこんでおり、そのまま伊豆山港付近で相模湾へと流



逢初川河口付近で被災状況を見学する参加者ら
(報告者撮影)

出する。谷沿いの崖では、兩岸の段丘を構成する過去の礫質河川堆積物が露出しているのが観察された。河口付近にて、北村氏から海まで土石流が到達したとの説明があり、災害調査で採取された土石流堆積物と源頭部の盛土のサンプルを回覧した。海岸沿いにある古湯「走り湯」を見学して、国道 135 号に架かる逢初橋周辺の被災状況を観察したのち、伊豆山神社の参道に沿って逢初川左岸の斜面を 400 m ほど急登し、伊豆山神社境内で休憩した。その後、土石流が直撃した熱海市消防団第四分団詰所付近を訪れた。ここで北村氏から、発災直後に実施した緊急調査と当時の状況に関する説明があった。消防団の詰所やその周辺の家屋には、土石流によって破壊された痕跡や付着した泥がそのまま残されていた。また、被害を受けた消防車や電柱などの施設も、ほぼ被災当時の状況で残されていた。続いて、逢初川に平行して上下流に移動しながら被災状況を観察した。土石流が流下した流路沿いには家屋が無く基礎のみが残されており、土石流の流下範囲を伺い知ることができた。また、大きくダメージを受けた家屋とほとんど被害が見受けられない家屋が隣接している場所もみられた。その後、路線バスを利用して熱海駅へ戻り、18 時前に解散した。

現地では、土石流の発生・流動メカニズムや被害の空間的特徴、ならびに今後の復旧と街づくりに関して、参加者間で活発に議論・意見交換が行われた。今回の伊豆山地区における土砂災害は、源頭部における盛土(人為的要因)が主要な素因とされているが、一方で、逢初川沿いのわずかな地形の凹凸や、段丘化しているか否かなどの地形的素因によって、被害の程度に大きな差がみられ

ることなどが参加者間で指摘・議論された。多様な専門分野の研究者が集い、領域横断性を強みとする第四紀学は、降水様式の変化や人為的な地形改変、市街地の拡大に伴う近年の災害リスクの変化に対しても、独自の視点から総合的に議論・評価し、近い将来の防災・減災に貢献することが可能であろう。

今回、被災地を実際に訪れたことで、この土砂災害の被害の甚大さを改めて認識した。被災された方、亡くなられた方とそのご家族に、心よりお見舞いとお冥福を申し上げます。また、巡検では、北村氏による詳細な解説と写真資料によって、発災直後の現地の状況を如実に把握することができた。巡検を企画・準備してくださった北村氏と、同行・サポートして頂いた静岡大学の学生の皆様に厚く感謝を申し上げます。



熱海市消防団第四分団詰所付近の状況（報告者撮影）

文献：北村晃寿（2022）2021年7月3日に静岡県熱海市伊豆山地区で発生した土砂災害の写真資料。静岡大学地球科学研究報告，49，105～137。

◆ 2022 年大会若手・学生発表賞受賞者

2022 年静岡大会において若手・学生発表賞にエントリーされた発表の中から、若手・学生発表賞選考委員会（中塚 武委員長、池原 研委員、堀 和明委員、里口保文委員、須貝俊彦委員）による選考結果とその後の執行部会での承認により、下記の方々の受賞が決まりました。

■ 口頭若手部門 1 名（選考対象 3 件）

受賞者：嶋田侑真 会員

タイトル：三重県南部の沿岸湖沼における過去 3000 年間の海水侵入の履歴

発表者：嶋田侑真（産総研・東京大）・澤井祐紀（産総研）・松本 弾（産総研）・谷川晃一郎（産総研）・伊藤一充（産総研）・田村 亨（産総研・東京大）・行谷佑一（産総研）・宍倉正展（産総研）・藤野滋弘（筑波大）

■ 口頭学生部門 2 名（選考対象 9 件）

受賞者：中西 諒 会員

タイトル：北海道日高地域において復元された完新世の古海水準・堆積環境変化とイベント層の形成・保存に与える影響

発表者：中西 諒（東京大）・芦 寿一郎（東京大）・宮入陽介（東京大）・横山祐典（東京大）

受賞者：館野宏彰 会員

タイトル：臨海扇状地における河成段丘の形成プロセス — 浜松平野を例として —

発表者：館野宏彰（東京大）

■ ポスター若手部門 1 名（選考対象 3 件）

受賞者：平林頌子 会員

タイトル：U/Th 年代測定および ^{14}C 年代測定による熊本県球泉洞の石筍の年代測定と DCF 変化

発表者：平林頌子（東京大）・石沢成美（東京大）・宮入陽介（東京大）・阿瀬貴博（東京大）・横山祐典（東京大）

■ ポスター学生部門（選考対象 3 件）

該当者なし

◆ 2022 年学会賞等受賞者の言葉

＜学会賞 受賞者の言葉＞ 池原 研（産業技術総合研究所）



この度は、荣誉ある「日本第四紀学会学会賞」を授与していただき、誠にありがとうございます。推薦者並びに選考委員の皆様、厚くお礼申し上げます。たいへん名誉なことと、深く感謝しております。

私は、東京学芸大学でジュラ紀の植物化石で卒業研究を行い、学卒で地質調査所に入所して、海底堆積物の研究を始めました。地質調査所では、日本周辺の海洋地質図の作成プロジェクトを進めており、表層堆積図の作成が私の業務であり、研究内容となりました。最初の数年は、四国沖から九州周辺の海域が担当範囲で、陸棚上の砂質堆積物が潮流や海流で動いて作るベッドフォームや堆積システムが面白くて、初めての英語の論文もここから生まれました。その後、調査範囲が日本海に移り、陸棚が狭く、泥の海の日本海では別のテーマに取り組まざるを得なくなり、表層地層探査記録と堆積物コアを融合させた斜面域の海底地すべりや重力流堆積物の仕事を始めました。また、日本海の堆積物中には太平洋側の堆積物には見られない岩相変化やテフラの挟在などが見られたことで、研究は自ずと古環境変化やテフラを含めた層

序に広がっていきました。

科学技術庁に出向していた時に、神戸の地震が起きました。科学技術庁の隣の席の水路部から出向していた人から、「池原さん、海で地震関係の仕事をしましょうよ」と誘われたのが、私のイベント堆積物研究の始まりでした。最初はイベント堆積物の堆積年代を決めて、地震履歴を明らかにする、という単純な考えで取り組みましたが、今一つ、面白みが増しません。この仕事に面白みを感じなくなったのは、2011年東北沖地震・津波の後です。海底でどのような現象が起き、どのようなプロセスでイベント堆積物が形成されたのか、どのような地震が海底堆積物に記録されているのか、そして堆積物から読み取れる履歴は何を示すのか。自分なりの考えができるようになると、研究はどんどん面白みを増し、IODP航海の実施に至りました。この過程では、テフラや年代測定といった「第四紀研究」の編集委員会で委員の皆さんに教わったことが大変役に立ったことを記しておきます。

私が大学を卒業する時に指導教官に「研究者になるなら、年に1本は論文を書くようにしなさい。それが、あなたが生きてるとみんなに知らせることだから」と言われ、論文を書くように心がけてきました。まだ、研究途中ではありますが、（毎年はずがに無理でしたが）言われたことをなんとか維持できていることを報告したいと思います。

最後になりますが、海の仕事は一人ではできません。長年にわたって協力してくださった方々、研究の周辺を支えてくださった方々を含め、関係者の皆様、深く感謝申し上げます。また、研究はまだ途中です。これからも様々な方々と協力して、研究を進めていきたいと思っております。今後とも、よろしく願い申し上げます。

＜学術賞 受賞者の言葉＞ 須貝俊彦（東京大学）



この度は、日本第四紀学会学術賞を授与していただき、誠に光栄に存じます。推薦いただいた方、

選考委員の先生方、共同研究者の皆様、深謝申し上げます。「湿润変動帯の地形学」を提唱された吉川虎雄先生の生誕100年目に、畏れ多い限りです。私は1980年代半ばに東京大学理学部地理学教室で地形学を学び、卒業研究で故郷の河成段丘を調べました。疑問が解けず、大学院で数年かけて、山間河谷の埋積と下刻が氷期・間氷期の洪水強度変化に起因することを、掃流力理論を基に検証しました。学位は、大森博雄先生にご指導いただき、隆起山地の開析過程の研究で取得しました。中部山岳では、標高2000m以上の河間地に準平原は残存しないことを、谷の切り合いモデルによって導きました。一方、高山域では周氷河作用によって

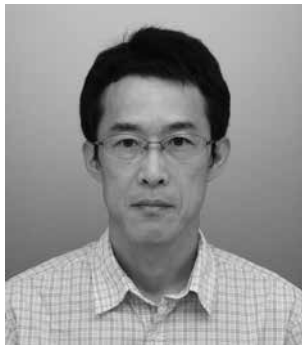
高位削剥面が形成されうることを観測データから推定しました。また、山地を解体する地すべりの規模頻度分布特性（GR 則の b 値）が地質と高度帯に依存することを発見しました。隆起によって山地が高くなると、大規模地すべりが地形変化に効くようになると考えられます。

阪神淡路大震災を機に、教養学部助手から地質調査所に転身し、研究対象を沈降・堆積域へ広げ、濃尾傾動地塊運動や関東造盆地運動の研究に着手し、北アナトリア断層の古地震調査に乗り出しました。すると 1999 年、32 年ぶりに北アナトリア断層が大地震を引き起こしました。母校にできた独立研究科に出戻った矢先でした。日本でも東日本大震災、西日本豪雨災害等が相次ぎ、学生と災害現場を訪れる機会が増えました。災害を生む突発的な地形変化と地形発達との関係の解明は進んでおりませんが、私を反面教師として後輩が活躍をはじめました。その先頭に立つ吉田英嗣明治大学教授が本年病没されました。第四紀火山の山体崩壊に着目し動的で定量的な地形発達像を示され

た吉田博士を失い、痛恨の極みです。

地形は、過去の地球表層プロセスの産物であり、未来の表層プロセスの支配要因でもあります。地形をつくる地質、地形を覆い地形を変える大気海洋、地形のうえに生きる人類の研究者が集う第四紀学会は、地形研究に最適の場です。第四紀における等速・定向的な地殻変動と周期的な気候・海水準変動の組み合わせを基調とする地形観が前世紀後半に定着しました。テフクロノロジーなどの編年学的研究の進歩と共に、地形発達史の解明が進みました。人新世を迎え、地形の大規模改変者たる人類は、地形の管理責任者になりました。突発的な地形変化と定常的な地形変化との関係や、山地、平野、河川、海岸などの様々な地形間の相互作用を、第四紀の時間スケールで空間的に統合することによって、地形変化を予測する必要があります。言うは易しですが、初心に帰ってやり残した研究に取り組むとともに、第四紀学会の発展に微力を尽くす所存です。今後ともよろしくお願い申し上げます。

<学術賞 受賞者の言葉> 澤井祐紀（産業技術総合研究所）



この度は日本第四紀学会学術賞を授与いただき、誠にありがとうございます。推薦して下さった方、選考委員会の皆様にも厚くお礼申し上げます。また、これまでの研究活動の中で指導して下さった先生方、共同研究者の方々、また野外調査や室内作業に協力していただいた方々に深く感謝いたします。

今回評価いただいた研究は、九州大学在学時の卒業研究にまで遡ります。卒業研究のテーマを決める際に鹿島 薫先生の研究室の門戸を叩き、北海道厚岸町の湿原で古環境の復元を行うことになりました。九州大学大学院に進学後は、同地域で津波堆積物の研究も始めました。九州から北海道に通うのは大変でしたが、現地の方々に温かく迎えていただき、非常に楽しく過ごすことができました。宿泊地で過ごした同世代の方々との時間は良い思い出です。鹿島先生は、常日頃より様々な研究者と交流することの重要性を説いており、大学の外において、南雲保先生からは珪藻の分類を、

北川浩之先生からは野外調査や年代測定について学ぶ機会を得ることができました。そうして得た知識や経験は、現在の私の研究の核になっています。大学院を卒業した後は、日本学術振興会特別研究員として国際日本文化研究センターで研究を行うことができました。この頃から、海岸における古環境変動復元の手法を古地震研究に応用することに本格的に取り組み始めました。安田喜憲先生の研究室には様々な研究者・大学院生が集まっており、共同作業を通して自身の研究を大きく発展させることができました。現在の所属先である産業技術総合研究所に採用された後は、佐竹健治氏、岡村行信氏の指導のもと、北海道だけではなく、東北地方や海外に対象地域を広げていくことができました。タイ、アメリカ西海岸、チリ、カナダ等で行った研究は、研究業績の積み上げというだけではなく、異なった背景を持った外国人とまとめ上げていく面白さに気づかせてくれました。特にアメリカ地質調査所の Brian Atwater 氏には公私にわたり大変お世話になりました。

私が学生の時と比較して、研究を取り巻く環境は大きく変わりました。博士課程が終了して数年経過した頃から、世界各地の沈み込み帯で M 8～9 クラスの地震が数多く発生し、それとともに地震・津波に関する地質調査のあり方が変わってきました。特に日本国内では、2011 年東北地方太平洋沖地震を契機に、地質記録から巨大地震・津波の履歴を明らかにする研究が社会的に注目されるようになりました。研究成果が求められる重圧は増しているように感じますが、今回の受賞を励み

にして、また、私の初心である「未踏の湿原に分け入って調査する楽しさ」を忘れないように心がけながら、社会的な要望に応えられるように日々

の研究を行っていく所存です。今後ともご指導、ご鞭撻の程、よろしく願い申し上げます。

<若手学術賞 受賞者の言葉> 篠崎鉄哉（産業技術総合研究所）



この度は、榮譽ある日本第四紀学会若手学術賞を授与して頂き大変光榮に存じます。推薦者および選考委員の皆様へ御礼申し上げます。

今回評価いただいた3編の論文はすべて津波堆積物に関する研究になります。掲載された順に申し上げますと、一つ目の論文は私が博士後期課程の時に調査・分析した研究です。北海道の湖沼で掘削した試料を用いてこれまでに認識されていなかった歴史津波の地質学的痕跡を発見した研究になります。視認困難な津波痕跡を見つけたこの研究は、今現在取り組んでいる研究にも大きく関係したものであり、大変重要なきっかけとなりました。産業技術総合研究所の澤井祐紀研究グループ長を初め、共著者の皆様に厚くお礼申し上げます。

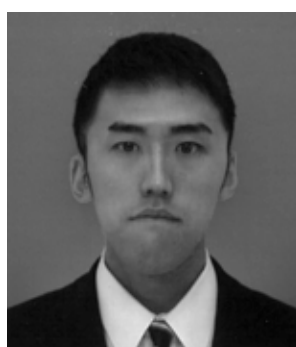
二つ目の論文は私が筑波大学でポスドクの時に行ったもので、津波堆積物の堆積プロセス、分布特性を水路実験で検討した研究になります。水路実験を行うのは学部生の時以来で、共著者である筑波大学の関口智寛先生ならびに茨城大学の山口直文先生に大変ご迷惑をかけながら実験や議論を行った記憶があります。共著者のお二人がいなかつ

たら論文になっていなかったと確信しており、改めてお二人にお礼申し上げたいと思います。慣れない研究に大変苦勞しましたが、自身にとって新しいアプローチでの研究は非常にいい経験であり、今後の研究活動にも新たな視野を与えるものであると感じています。

三つ目の論文は地球化学的手法で津波堆積物研究を行った論文をレビューした総説論文になります。AOGS 2017で招待講演の機会を頂戴し、その際の記念として書かせていただきました。単著で初めて英文の総説論文を書いたということで、執筆開始から投稿まで2年以上、査読プロセスでも1年ほどかかるなど、大変右往左往した論文になりましたが、この経験は今の執筆活動にも確実に活かしていると感じています。ちなみに査読者は匿名でしたが、Anonymousとして共著者に入っていたかと思ってしまうぐらい、非常に建設的なコメントを何度も頂戴しました。

上述しました通りこれら3編の論文は、野外調査と分析、水路実験、そしてレビュー論文と、すべて方向性が異なるものになっております。それぞれの論文に苦勞と強い思い入れがあるため、受賞の連絡を頂戴した時は込み上げてくるものがありました。今回賞を頂けたのは、共著者の皆様方はもちろんのこと、東京大学の後藤和久先生、筑波大学の藤野滋弘先生、高知大学の池原 実先生、ニューサウスウェールズ大学の Catherine Chagué 先生を初め、支えていただいた多くの方々のおかげだと実感しております。この賞を励みにして、第四紀学や地球科学の発展に少しでも貢献できるよう尽力していきたいと思っております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

<若手学術賞 受賞者の言葉> 石輪健樹（国立極地研究所）



この度は、榮譽ある日本第四紀学会若手学術賞を頂戴し、誠に嬉しく思います。推薦ならびに選考して頂いた方々に深く感謝いたします。また、今回評価いただいた論文の共著者の方々を含め、研究を進める上で多くの方々を支えられました。この場を借りて御礼申し上げます。私は野外調査、堆積物試料分析と GIA (Glacial Isostatic Adjustment) モデルをアプローチ法として、海水準・氷床変動の復元に取り組んでいます。現在観測されている氷床変動は数年から数万年スケール

の変動を含んでいます。そのため、地質試料やモデルシミュレーションから数十年以上スケールの変動を復元することは、現在および将来の氷床変動の高精度評価に繋がると考えています。今後も今回の受賞を糧にして、複数手法を積極的に導入して研究を幅広く展開していきたいと思っています。

この度受賞対象になった論文の一つは、海水準変動を含めた古環境復元の研究に不可欠な放射性炭素年代測定による年代モデル構築について論じた論文です。北西オーストラリア・ボナパルト湾で採取された堆積物コア試料の炭酸塩試料（有孔虫・貝類）と有機炭素に対し、数百点以上の放射性炭素年代測定を行いました。大陸棚における環境変化を古潮汐モデルと GIA モデルにより復元し、炭酸塩試料と有機炭素の年代の関係性が海水準変動に伴う潮流の変化の影響を強く受けることを示しました。この研究が今後の研究において古環境復元に不可欠な年代モデル高精度化の一助になればと思います。

もう一つの対象論文は、GIA モデル研究を始め

て以降、GIA モデルから南極氷床変動を制約した最初の研究になります。東南極・リッツホルム湾やプリッツ湾でこれまで報告されている海水準データを再評価し、東南極氷床が最終氷期最盛期以前に最大に達した可能性を示しました。博士課程までは堆積物試料の化学分析が主な研究手段だったため、GIA モデルをテーマにすることで苦労する部分も多かったですが、共著者の方々の支えもあり論文化することができました。

現在は最終間氷期以降の南極氷床変動史の復元を目指し、南極で採取した堆積物試料の分析を進めています。私は、今後も野外調査、堆積物試料採取、GIA モデルを研究手段とし、氷床変動史の復元や氷床変動メカニズムに取り組んでいきたいと思っています。さらに、低緯度域の研究経験も活かし、多様な研究手法を積極的に導入することで、地球システムの理解に繋がる研究を進めていきます。これからも皆様方のご指導ご鞭撻を頂きながら、分野の発展に貢献していきたいと思っています。今後とも、何卒宜しくお願い申し上げます。

<論文賞 受賞者の言葉> 白井正明（東京都立大学）



この度は私どもの論文を、日本第四紀学会論文賞として高く評価していただきまして、大変光栄に存じます。本論文では静岡県安倍川上流域において、約 300 年前の宝永地震の際に発生した大谷崩の大規模崩壊に由来するとされる土石流堆積物の分布を明らかにし、また赤水の滝周辺において、土石流堆積物に含まれる礫のインブリケーションから古流向を推定しました。これらの調査結果をもとに、赤水の滝は、当時穿入蛇行していた安倍川の谷（と尾根）が大規模土石流によって埋められたため、崩壊後の安倍川の流路が尾根を横切るようにショートカットして形成されたと結論づけました。また安倍川上流域の数ヶ所にある谷の狭窄部は、赤水の滝より規模が小さいものの、同様に谷と尾根が埋没したため、新たな流路が尾根を横切ることによって形成されたと推定しました。安倍川上流域には切り立った峡谷がところどころで見られますが、はじめて調査に入った頃には何

気なく見ていたこの光景が大規模土石流の流下の結果形成されたということに気づいた時は、大変感動したことを覚えています。

ところで今回の論文賞では、赤水の滝より下流側に分布する成層礫層がハイパーコンセントレイテッド流堆積物であることを指摘した点が、南海トラフ地震に伴う土砂災害の研究や河川防災対策に影響を及ぼすと評価されています。従来この成層礫層は、土石流堆積物が二次的に再移動・再堆積したものと考えられていたのですが、土石流から遷移したハイパーコンセントレイテッド流が赤水の滝の下流まで一気に到達したのであれば、土砂災害としての危険性も大きく変わってくるためです。ただ、本論文ではハイパーコンセントレイテッド流堆積物自体についてはほとんど触れていないので、この点を評価されて論文賞を頂いたことについては少々気恥ずかしく思うところです。一方で本論文は礫質堆積物を研究対象としていることもあり、ほとんどが野外調査の結果をもとに執筆しました。高精度の分析機器等を駆使した研究が多い中、このような地味な論文に賞を頂けたことは、私達自身を含めて野外調査主体の研究を進める研究者にとって大いに励みとなると感じており、大変ありがたく思っております（そのような次第で、今回の筆頭著者写真は、赤水の滝を背景に野外で撮影しました）。

最後になりますが、本論文に関わる研究の実施と論文の公表に力を貸して下さった全ての方に、この場を借りて御礼申し上げます。

◆第四紀通信の発行回数変更と第四紀研究の発行月変更のお知らせ

2023年2月から第四紀通信の発行を、現在の年6回から、年4回の発行へと変更します。

第四紀通信はこれまで、2月、4月、6月、8月、10月、12月の偶数月に年6回発行していましたが、編集事務の負担が大きくなっていました。一方で、第四紀研究は、現在、3月、6月、9月、12月の年4回発行しておりますが、第四紀通信との発行月が合わない月が年3回あり、送料と発送事務手数料にも負担が出ていました。2022年大会の総会において、第四紀通信の発行を年4回に変更し、第四紀研究の発行月も変更することで、第四紀通信と第四紀研究を同時に2月、5月、8月、11月の月上旬に年4回で発行・発送する案が提示され、承認されました。

これまで第四紀通信でお知らせしていた内容で、年4回で間に合わないものは、学会ホームページとメーリングリストを使って滞りなくお知らせしていく予定です。会員の皆様には、会員マイページを通して、メーリングリストに登録していただくとともに、最新のメールアドレスに更新していただきますよう、よろしく願い致します。今後、学会ホームページもスマホ対応のページに変更していく予定です。

(広報委員会)

◆役員選挙に向けての所属領域の変更手続きと2022年度会費納入のお願い

2023-2024年度の会長・副会長・評議員を決める役員選挙が2023年3月～4月頃に実施される予定です。各領域の評議員の定数は、2023年2月1日時点での各領域に所属する正会員の数によって決定されます。日本第四紀学会領域規程 (<http://quaternary.jp/intro/rules/ryouiki.html>) 第4条により、ご自身の所属領域を変更したい方は、今年の10月1日から12月31日までの間なら、変更することができます。この期間を逃すと、領域を変更できるのは2年後になります。領域を変更したい方は、今年10月1日～12月31日の間に、会員マイページからご自身で変更をしていただきますようお願いいたします。なお、メールまたは郵送で日本第四紀学会事務局（連絡先は本通信最後のページ参照）に変更依頼をすることもできます。領域の指定がなされていない会員は、そのままでは実質的に選挙権・被選挙権ともありませんので、領域の選択をお願いします。また、所属先や住所などの変更があった方も、会員マイページを利用して会員情報の更新をすることができます。

会員マイページから領域など個人情報を変更する方法は以下の通りです。第四紀学会ホームページ (<http://quaternary.jp>) トップにある「会員マイページ」ボタンをクリックし（直接は <https://mypage.sasj2.net/site/jaqua>）、会員ID番号（会費請求書あるいは会誌・会報が入った封筒の会員宛名の下に書かれている10桁の数字）とパスワードを入力し、ログインしてください。次に「会員情報更新」→「会員情報の変更」ボタンをクリックして、修正ください。会員ID番号が不明の方は、第四紀学会事務局あてにご自身の氏名、メールアドレス、第四紀学会会員であることを証明する所属先・現住所などの情報を記して、お問い合わせください。会員ID番号とパスワードは各自で控えておくようお願いいたします。

また、2023年2月1日時点で会費が納入されていないと、正会員は役員選挙規程第15条に基づき、この役員選挙の選挙権並びに被選挙権が与えられません。2022年度会費未納入の方は遅くとも2023年1月までに納入をお願いいたします。会費の納入状況は会員マイページで確認することができます。

役員選挙の投票は、会員マイページ内から行います。なお、会員マイページを使ってほかに会員名簿検索ができ、総会資料やJ-STAGE閲覧のパスワードなども確認できます。

(庶務委員会)

◆第21回国際第四紀学連合 INQUA2023 ローマ大会への若手派遣支援について

日本第四紀学会ではINQUA2023 ローマ大会(2023年7月14～20日)への若手派遣支援を致します。正会員であり筆頭発表者であることが最低条件で、現在執行部会でその他の詳細を検討しています。申請条件や支援内容などは今後、第四紀学会のメーリングリスト等を通じて広報致します。

◆吉田英嗣博士のご逝去を悼む

本学会正会員の吉田英嗣博士が、病氣療養中のところ、2022年1月15日に永眠されました。42歳でした。吉田博士は、1979年7月20日に千葉県に生まれ、埼玉県立浦和高校を御卒業後、東京大学理学部地学科で自然地理学・地形学を学び、2002年3月に卒業されました。ただちに、東京大学大学院新領域創成科学研究科環境学専攻に進学し、日本学術振興会特別研究員DCを経て、2007年3月に博士（環境学）を取得されました。博士論文「火山体の崩壊に伴う大規模土砂移動と流域の地圏環境変動」は、島弧の土砂生産ならびに下流平野の発達に対する火山体崩壊の役割を定量的に解明した新規性が高く評価され、東京大学大学院新領域創成科学研究科研究科長賞を受賞しました。中央大学理工学部助教、関東学院大学経済学部専任講師、明治大学文学部地理学教室専任講師、准教授等を経て、2021年より同教室で教授を務めておられました。

吉田英嗣博士は、野外調査、堆積物やテフラの分析、地形計測、統計解析を組み合わせ、日本各地で第四紀に発生した山体崩壊とそれに伴う土砂移動現象を解明し、国際誌を中心に優れた学術論文を多数発表されてきました。第四紀研究には、44巻1号、45巻2号（英文）、49巻2号等に筆頭論文が掲載されています。日本地理学会賞（若手奨励部門）、日本地形学連合研究奨励賞等も受賞されています。吉田博士は、学会活動にも積極的に貢献され、とくに日本第四紀学会においては、庶務委員会委員、選挙管理委員会委員・同委員長を歴任され、学会の発展に貢献されました。

吉田博士は、2016年冬に体調を崩されましたが、ご家族や職場の皆様の支えのもと、前向きな姿勢を貫かれ、研究を継続発展させるとともに、2021年度まで地形学や自然地理学の講義を担当されました。2017年に、文科系の大学生向けに「はじめての自然地理学」（古今書院）を、2年後には増補版を出版するなど、教育面でも幅広く貢献されました。明治大学吉田ゼミでは、毎年、日本各地で



群馬県渋川市白井遺跡群発掘現場にて
2015年7月12日撮影

野外調査合宿を実施し、学生の自主性を伸ばすことをモットーに、研究対象を第四紀の火山地形から、周水河地形、活断層や河川の地形へと広げながら、フィールドワークを通じてゼミ生を鍛えておられました。修士、博士研究の指導も熱心に行い、お亡くなりになる直前まで、メール等を通じて後進の育成に尽力されました。吉田先生の指導学生は学会で優秀賞を受賞するなど、多方面で活躍されています。吉田英嗣博士には、日本の第四紀研究のリーダーとしての活躍が囑望されていました。新進気鋭の研究者を失い、痛恨の極みです。ご冥福をお祈りいたします。

（東京大学・須貝俊彦）

◆日本第四紀学会 2023年大会案内(第1報)

2023年大会は以下の概要にて開催の予定です。

日 程：2023年8月末～9月上旬頃を予定

会 場：早稲田大学 所沢キャンパス(所沢市三ヶ島 2-579-15)

大会実行委員長：山田和芳(早稲田大)

実行委員：工藤雄一郎(行事委員長・学習院女子大)

◆日本第四紀学会 2022年度第1回評議員会議事録

日 時：2022年8月25日(木) 14:00～17:00

方 法：Zoomシステムを用いたオンライン会議

出席者：鈴木毅彦(会長)、北村晃寿(副会長)、
須貝俊彦(副会長)、(以下、評議員)

久保純子(議長)、加 三千宣、坂下 涉、
田村 亨、平林頌子、吾妻 崇、荻谷愛彦、
佐藤善輝、宍倉正展、丹羽雄一、藤原 治、
堀 和明、青木かおり、岡田 誠、兵頭
政幸、水野清秀、井上 淳、工藤雄一郎、
齋藤めぐみ、高原 光、中塚 武、那須
浩郎、百原 新、小荒井 衛、三田村宗樹、
日代邦康、山田和芳

委任状：7通(議長委任)

水野清秀庶務委員長の司会で開会され、鈴木毅彦会長の挨拶があり、定足数の確認に続いて、2022年度評議員会議長に久保純子評議員、議長代理に岡田 誠評議員が昨年度から継続して選出された(もう1名の議長代理は未定)。以降は久保議長により議事が進められた。最後に須貝俊彦副会長の挨拶で閉会となった。

(1) 2021年度事業報告

担当の各委員長、領域代表またはその代理の評議員から報告が行われた(総会議事録の資料1参照)。

(2) 2021年度会計決算報告・会計監査報告

齋藤めぐみ会計委員長から、2021年度会計決算報告の説明が行われた(総会議事録の資料2参照)。また、2021-2022年度会計監査の三浦英樹・横山祐典両会員から会計監査報告があり(総会議事録の資料3)、コメントを水野庶務委員長が代読した。

(3) 顕彰規程等の改訂に関する検討報告

顕彰規程等に関する検討委員会の答申を水野庶務委員長が代読し、答申を受けて執行部会を中心に検討を進めることが報告された(総会議事録の資料4参照)。

(4) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

齋藤文紀委員長の報告記事を水野庶務委員長が代読した(総会議事録の資料5参照)。

(5) 会計年度の区切りを1か月早める提案(審議事項)

水野庶務委員長より、説明と具体的な規約改訂案が示され、総会に諮ることを前提に承認された(総会議事録の資料7参照)。

(6) 第四紀通信の年間発行回数および第四紀研究の発行月の改訂案(審議事項)

那須浩郎広報委員長より、第四紀通信はPDF版のみをホームページに掲載し冊子を作らない第1案、第四紀研究と第四紀通信を年4号でゆうメールで同時発行・配送とする第2案、第四紀研究は第四種郵便、第四紀通信はゆうメールで配送する第3案、が示され、審議の結果、第2案のみを総会で提案することにした。

(7) 会費のオンライン決済について(審議事項)

齋藤会計委員長より、会費のオンライン決済システムを導入することの提案があり、その費用やスケジュール等の説明を受けて、2022年度からシステムの構築を進めることを承認した。総会では、2022年度事業計画内で説明することにした。

(8) 2022年度事業計画(審議事項)

各担当委員長、領域代表またはその代理の評議員から説明があり、総会に諮ることで承認された(総会議事録の資料9参照)。

(9) 2022年度予算案(審議事項)

齋藤会計委員長から、予算案が示され、特にINQUA2023大会への若手参加補助、パンフレット「第四紀とは」改訂費用などの説明があり、承認された(総会議事録の資料10参照)。

(10) 「寄付金の取扱い等に関する内規」修正案(審議事項)

継続審議案件となっていた寄付金に関する内規の修正案が齋藤会計委員長から説明され、一部文言を追加する修正を行ったうえで承認された(総会議事録の資料6参照)。

◆日本第四紀学会 2022 年総会議事録

日 時：2022 年 8 月 27 日 (土) 15:00 ～ 17:00 (授賞式を含む)

方 法：大会会場（静岡県地震防災センター）での対面と Zoom システムを用いたオンラインによるハイブリッド会議

司会の須貝俊彦副会長による開会の辞、鈴木毅彦会長、北村晃寿大会実行委員長の挨拶が続き、定足数の確認（委任状を含め正会員数の 10 分の 1 以上の出席が必要）が行われ、総会成立条件を満たしていることが水野清秀庶務委員長より報告された（最終的な参加者数は、会場参加正会員 58 名、オンライン参加正会員 17 名、委任状 82 通：すべて議長委任、そのほかオンライン参加名誉会員 1 名）。議長に藤原 治会員を選出し、下記の議事が進められた。総会に引き続いて、授賞式が前李英明・西澤文勝両庶務委員の担当でとり行われた。

(1) 2021 年度事業報告

資料 1 に基づき、水野庶務委員長が説明を行い、承認された。

(2) 2021 年度会計決算報告・会計監査報告

齋藤めぐみ会計委員長から資料 2 に基づき、会計決算報告が行われた。また、2021-2022 年度会計監査の三浦英樹会員・横山祐典会員から資料 3 に基づき会計監査報告が行われた（報告は横山会員）。これらの報告は承認された。

(3) 顕彰規程等の改訂に関する検討報告

資料 4 に基づき、顕彰規程等に関する検討委員会の答申と執行部会の今後の対応について、水野庶務委員長から説明が行われた。

(4) 2022 年学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告

(5) 2022 年論文賞・奨励賞受賞者・受賞論文選考報告

(6) 2022 年功労賞受賞者選考報告

各選考報告資料は、「第四紀通信」29 巻 4 号掲載と同じ内容であり、各賞の受賞者名が水野庶務

委員長から報告された。

(7) 日本学術会議 INQUA 小委員会報告

資料 5 に基づき、齋藤文紀委員長の報告記事を水野庶務委員長が代読した。

(8) 2022 年度第 1 回評議員会審議事項報告

8 月 25 日 (木) にオンラインで開催された評議員会での審議事項の結果が水野庶務委員長によって簡単に報告され（詳細は 2022 年度第 1 回評議員会議事録参照）、特に「寄付金の取扱い等に関する内規」案が一部修正のうえ、承認されたことが説明された（資料 6）。

(9) 会計年度の区切りを 1 か月早める提案（審議事項）

資料 7 に基づき、水野庶務委員長より、会計年度の区切り時期を 1 か月早め、6 月 30 日 / 7 月 1 日とする提案の説明が行われ、承認された。

(10) 第四紀通信の年間発行回数および第四紀研究の発行月の改訂案（審議事項）

資料 8 に基づき、那須浩郎広報委員長より、第四紀通信を第四紀研究と同時の年 4 回（2、5、8、11 月）発行・発送とする提案の説明が行われ、承認された。

(11) 2022 年度事業計画（審議事項）

資料 9 に基づき、会計委員会については齋藤会計委員長、その他については水野庶務委員長が説明を行い、承認された。

(12) 2022 年度予算案（審議事項）

資料 10 に基づき、齋藤会計委員長が説明を行い、承認された。

(13) 2022 年名誉会員の決定（審議事項）

2021 年度第 3 回評議員会において名誉会員候補者となった中村俊夫会員、松浦秀治会員、山崎晴雄会員に対して、この 3 名を名誉会員とすることが承認された（推薦理由などは「第四紀通信」29 巻 4 号の名誉会員候補者選考報告参照）。

【資料 1】 2021 年度事業報告 (2021 年 8 月 1 日～ 2022 年 7 月 31 日、一部は 2022 年 8 月中旬までの経過)**1 庶務委員会** (委員長：水野清秀)

- (1) 総会、評議員会 (3 回)、執行部会 (年度内に 5 回、2022 年度に 1 回) を Zoom を用いたオンライン会議として行った。
- (2) 入退会の申し出への対応を行い、会員名簿の管理を行った。2021 年度末 (2022 年 7 月 31 日) における会員数は以下の通りである。
正会員 929 名 (うち学生会費適用者 19 名)、賛助会員 9 社、名誉会員 17 名。(なお、2021 年 7 月 31 日時点での会員数は正会員 960 名、賛助会員 9 社、名誉会員 18 名)
逝去会員 (2021 年総会報告以降)：佐々木悠二会員、糸魚川淳二名誉会員、吉田英嗣会員、清水康守会員
- (3) 若手学生発表賞受賞者選考、学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考、論文賞受賞者選考、名誉会員候補者・功労賞受賞者選考に関する業務を行った。
- (4) 転載許可申請に関する業務を行った (転載許可 8 件、著者による転載報告 1 件)。
- (5) 学協会からのシンポジウム等の共催・後援等に関連する業務を行った (協賛 1 件、共催 4 件、後援 3 件)。また、アンケートや助成募集等への対応を行った。
- (6) 受け入れ図書・資料の整理を行った。
- (7) その他、学会活動に関する庶務業務を行った。

2 会計委員会 (委員長：齋藤めぐみ)

- (1) 会計に関する承認業務を行った。
- (2) 2021 年総会において、2020 年度の収支決算を報告し、2021 年度の予算案を提案した。
- (3) 2020 年度決算に対し会計監査を受けた。
- (4) 2022 年度の予算原案を作成した。
- (5) オンライン決済システムの導入を検討した。
- (6) 「デジタルブック最新第四紀学」は完売した。

3 編集委員会 (委員長：荻谷愛彦)

- (1) 第四紀研究第 60 巻第 3 号 (学術賞受賞記念論文 1 編、書評 1 編、26 頁+@)、4 号 (論説 1 編、11 頁)、61 巻 1 号 (学術賞受賞記念論文 1 編、論説 1 編、書評 2 編、60 頁)、2 号 (短報 1 編、講座 1 編、21 頁) を刊行した。60 巻の総頁数は 85 頁である (参考：59 巻 160 頁、第 58 巻 396 頁、第 57 巻 237 頁、第 56 巻 274 頁、第 55 巻 273 頁)。
- (2) 2021 年 7 月シンポジウム特集号「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて (特集号委員長 奥野 充)」及び 2021 年大会シンポジウム特集号「近畿における歴史時代の

自然環境と自然資源 (特集号委員長 井上 淳)」の投稿受付を開始した。また 2016 年大会シンポジウム特集号「領域 2 陸上の諸プロセス—その 2 (特集号委員長 須貝俊彦)」について対応を継続した。

- (3) 2022 年 8 月 1 日現在、通常号の受理済み原稿 (書評を除く) は 6 編 (61 巻 3 号以降に掲載予定)・審査中 9 編である。特集号については審査中が合計 8 編である。
- (4) 共著論文における「著者貢献」の記述を必須化し、「第四紀研究執筆要項」の一部を改訂した。学会ホームページでは修正済みであるが、冊子体では 62 巻 1 号から改訂版を掲載する。また「第四紀研究」におけるカラー図版の掲載様式について著者の希望が多様化している現状を鑑み、投稿時送り状の一部を改訂し、61 巻 1 号に掲載した。
- (5) 編集委員会を遠隔方式で 10 回 (2021 年 8 月 28 日、10 月 1 日～ 8 日、10 月 4 日～ 11 日、10 月 7 日～ 12 日、10 月 16 日～ 25 日、11 月 4 日～ 15 日、2022 年 1 月 14 日～ 24 日、2 月 28 日～ 3 月 7 日、3 月 10 日～ 28 日、6 月 18 日～ 27 日) 開催した。これ以外にもメール審議を開催し、英語論文における査読意見のやりとりを用いる言語を初回投稿時、著者に確認することを内規に盛りこむこととした。また印刷会社の社名変更や冊子体カラー印刷費著者負担見積額の伝達方式 (現在は学会事務局→著者であるが、今後は原則として編集書記→著者とする) の変更に伴い、別刷単価表についても準備でき次第修正することとした。
- (6) 編集書記用ノートパソコン及びプリンタが経年劣化したため各 1 台新規購入した。

4 広報委員会 (委員長：那須浩郎)

- (1) 「第四紀通信」の編集および学会ホームページ、メーリングリストの維持管理を行った。
- (2) 「第四紀通信」第 28 巻 5、6 号、第 29 巻 1、2、3、4 号を編集し、発行した。
- (3) 上記「第四紀通信」各号の電子版 (PDF 版) を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載した。
- (4) 日本第四紀学会ホームページを通じて広報、情報提供等を行った。
- (5) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて広報、情報提供等を行った。2021 年度の配信件数は 127 件 (#1353～1480)。
- (6) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行った。

5 行事委員会（委員長：工藤雄一郎）

- (1) 日本第四紀学会 2021 年大会を 2021 年 8 月 27 日（金）～ 29 日（日）にオンラインで開催した。28 件の口頭発表と 22 件のポスター発表があった。
- (2) 2021 年日本第四紀学会学会賞・学術賞記念講演会を第 1 回：2022 年 2 月 12 日（土）、第 2 回：2022 年 6 月 4 日（土）に開催した。
- (3) 日本第四紀学会 2022 年大会を 2022 年 8 月 26 日（金）～ 28 日（日）に、静岡県地震防災センターで開催すべく、準備を進めた。

6 渉外委員会（委員長：山田和芳）

- (1) 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2022 年大会 (5 月 22 日～ 6 月 3 日：ハイブリッド形式) のセッションとして『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』、『活断層と古地震』を単独及び共同提案主催し、そのほか 4 つのセッションを共同提案した。また、2021 年 11 月 29 日の学協会会議に参加した。環境災害対応委員会会議 (2021 年 10 月 8 日および 2022 年 7 月 11 日：オンライン) に参加した。
- (2) 防災学術連携体が主催する第 6 回防災推進国民大会 (ぼうさいこくたい) (2021 年 11 月 6～7 日開催) にて、西山賢一会員が日本第四紀学会として講演を行った。2022 年 5 月 9 日開催の日本学術会議公開シンポジウム・第 13 回防災学術連携シンポジウム「自然災害を取り巻く環境はどう変化してきたか」にて、鈴木克明会員が日本第四紀学会として講演を行った。また、2022 年 8 月 2 日にオンライン開催の第 4 回「防災に関する日本学術会議・学協会・府省庁の連絡会」一激化する気象災害への備えー、同日オンライン開催の総会に参加した。
- (3) 自然史学会連合の総会 (2022 年 1 月 10 日：オンライン) に参加した。

7 領域 1「気候変動及び海洋の諸プロセス」(領域代表：田村 亨)

- (1) 2021 年 9 月および 2022 年 5 月に開催された Anthropocene Working Group のワークショップにおいて、人新世 GSSP を審査するための各候補サイトのプレゼンテーションが行われ、加 三千宣会員が別府湾サイトの研究成果を発表した。
- (2) 2021 年 12 月に金沢大学との共催で、古海洋に関するオンライン国際ミニシンポジウム「Proxy for Paleotemperature Reconstruction: a key to understanding the past climate change」を開催した。
- (3) 2022 年 5 月の JpGU2022 においてユニオンセッション「Advanced understanding of

Quaternary and Anthropocene hydroclimate changes in East Asia」を窪田 薫会員と横山祐典会員がコンビーナとして開催した。

8 領域 2「陸上の諸プロセス」(領域代表：堀 和明)

- (1) 2021 年 7 月 24 日・25 日に開催した共催遠隔シンポジウムに関して、第四紀研究特集号「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」(特集号委員長 奥野 充) への論文投稿・審査が進められた。2016 年千葉大会シンポジウム特集号「領域 2 陸上の諸プロセス—その 2 (特集号委員長 須貝俊彦)」についても論文審査が継続中である。

9 領域 3「層序と年代基準」(領域代表：卜部厚志)

- (1) 継続案件のシンポジウムの企画・開催に向けた検討を行った。

10 領域 4「人類と生物圏」(領域代表：海部陽介)

- (1) 次回公開シンポジウムのテーマについて協議し、縄文時代早期をテーマにした企画を、2023 年 3 月 5 日（日）に國學院大學にてハイブリッド方式で実施することを決めた。

11 領域 5「現代社会に関わる第四紀学」(領域代表：目代邦康)

- (1) 現代社会に関わる第四紀学に関するテーマでの、シンポジウムあるいは講演会等について、その実施内容について検討している。
- (2) 本学会のパンフレットの内容について検討を行っている。

12 オンライン委員会 (特別委員会、委員長：久保田好美、委員長代理：目代邦康)

オンラインによる会議・講演会などの運営や会員サービスの IT 化等の推進を支援するため、2021-2022 年度に限定して、オンライン委員会が設置された。

執行部会や各委員の情報のやりとりを整理するため、ビジネスチャットである Slack の使用環境を整えると同時に、オンラインサービスを用いた会議議事録等の編集の簡便化をはかった。また、オンライン総会、大会、講演会のサポートを行った。今回、講演会の準備の段階でミスがあり、人数制限がかかってしまった。原因を明らかにし、今後同様のミスが起こらないよう、Zoom 大規模ミーティングのオプション購入などの対応を行った。今後、オンラインでの活動が増えることが考えられるため、オンライン委員会マニュアル作成をすすめている。

【資料2】2021年度会計決算報告

日本第四紀学会

2021年度収支会計報告
(2021年8月1日～2022年7月31日現在)

収入の部					(単位:円)
科目	予算額①	7月31日現在②	増減②-①	執行率②/①	摘要
会費収入	8,772,000	8,565,644	-206,356	97.6%	正会員910名、学生会員19名、賛助9社(2022年7月31日時点)
正会員会費収入	8,572,000	8,365,644	-206,356	97.6%	通常会員会費8,236,000円 学生会員会費80,000円 海外会員会費49,644円
賛助会員会費収入	200,000	200,000	0	100.0%	20,000円×9社(10口)
誌代	700,000	504,064	-195,936	72.0%	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過買代収入	250,000	416,550	166,550	166.6%	60巻3号～4号、61巻1号～2号 別刷・カラー代等
雑収入	150,000	791,111	641,111	527.4%	デジタルブック購入、2021オンライン大会賛金(255,572円)、JST等
利子収入	1,000	296	-704	29.6%	預金利息
広告料収入	0	0	0		2021年大会予備集広告無しのため
役員選挙積立金取崩収入	0	0	0		
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	0		
名簿作成積立金取崩収入	150,000	150,000	0	100.0%	名簿作成積立金取崩(不要のため)
予備費積立金取崩収入	0	0	0		
収入合計	10,023,000	10,427,665	404,665	104.0%	
前期繰越金	20,288,031	20,288,031	0	100.0%	
合計	30,311,031	30,715,696	404,665	101.3%	

支出の部					(単位:円)
科目	予算額①	7月31日現在②	増減②-①	執行率②/①	摘要
会誌発行費	3,101,200	3,329,405	228,205	107.4%	第四紀研究 60巻3号～4号、61巻1号～2号
印刷費	1,500,000	1,603,360	103,360	106.9%	
編集費	300,000	453,235	153,235	151.1%	編集書記用PC購入、編集費
編集人件費	1,201,200	1,201,200	0	100.0%	編集書記手当
別刷印刷費	100,000	71,610	-28,390	71.6%	
会誌・会報発送費	600,000	621,883	21,883	103.6%	第四紀研究 60巻3号～4号、61巻1号～2号、第四紀通信 28巻4号～5号、29巻1号～3号
会報発行費	785,000	728,461	-56,539	92.8%	第四紀通信 28巻4号～6号、29巻1号～3号
印刷費	500,000	478,830	-21,170	95.8%	
編集費	75,000	72,831	-2,169	97.1%	第四紀通信編集費
編集人件費	210,000	176,800	-33,200	84.2%	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	89,820	-80,180	52.8%	HP更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	380,000	220,000	-160,000	57.9%	2022年大会運営準備金
巡検準備金	100,000	0	-100,000	0.0%	2022年大会分
講演会・シンポジウム	50,000	0	-50,000	0.0%	シンポジウム・受賞記念講演開催費
予備集印刷費	0	0	0		2021年大会講演要旨集
学会賞等顕彰費	320,000	294,754	-25,246	92.1%	学会賞等賞状作成費、若手学術賞・奨励賞副賞
会議費	60,000	25,442	-34,558	42.4%	Zoom利用料
通信費	380,000	175,221	-204,779	46.1%	会費請求書送付費、事務通信費等
旅費・交通費	100,000	3,458	-96,542	3.5%	会計監査会交通費
印刷費	350,000	261,317	-88,683	74.7%	学会専用封筒、コピー代
業務委託費	2,400,000	2,261,903	-138,097	94.2%	事務委託費、マイページ関連費用
領域活動費	750,000	0	-750,000	0.0%	
領域1	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域2	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域3	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域4	150,000	0	-150,000	0.0%	
領域5	150,000	0	-150,000	0.0%	
INQUA対策費	0	0	0		
役員選挙費	0	0	0		
名簿作成費	—	—	—		
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0		
役員選挙費積立金繰入支出	200,000	200,000	0	100.0%	役員選挙積立金へ
名簿作成積立金繰入支出	—	—	—		
予備費積立金繰入支出	1,200,000	1,200,000	0	100.0%	予備費積立金へ
加盟学協会分担金支出	50,000	30,000	-20,000	60.0%	地球惑星科学連合、防災学術連携体、(自然史学会連合会は無し)
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	0	100.0%	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	18,260	-31,740	36.5%	振込手数料等
予備費	0	0	0		
支出合計	11,096,200	9,509,924	-1,586,276	85.7%	
次期繰越金	19,214,831	21,205,772	1,990,941	110.4%	
合計	30,311,031	30,715,696	404,665	101.3%	

貸借対照表
(2022年7月31日現在)

(単位：円)

借 方		貸 方	
科 目	金 額	科 目	金 額
流 動 資 産		流 動 負 債	
郵便振替	7,362,853	前受会費	2,261,000
小口現金	751,120	未払金	20,000
普通預金	15,616,235	小 計	2,281,000
現金(事務局)	13,356	正 味 財 産	
未収金	243,208	名簿作成積立金	0
固 定 資 産		役員選挙積立金	200,000
定期預金	10,000,000	INQUA対策積立金	300,000
		予備費積立金	10,000,000
		次期繰越金	21,205,772
		(前期繰越金)	20,288,031)
		(当期収支差額)	917,741)
		小 計	31,705,772
合 計	33,986,772	合 計	33,986,772

財産目録
(2022年7月31日現在)

(単位：円)

資 産 の 部		金 額
科 目	摘 要	金 額
郵便振替	郵便局(年会費振込専用口座)	7,362,853
小口現金	編集書記手許金	751,120
普通預金	みずほ銀行早稲田支店	15,409,108
	三井住友信託銀行本店営業部	207,127
現金	事務局手持ち金	13,356
未収金	誌代(会誌収入)	121,088
	別刷代・超過頁代収入	122,120
流動資産合計		23,986,772
定期預金	三井住友信託銀行本店営業部	10,000,000
固定資産合計		10,000,000
合計		33,986,772

負債の部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
前受会費	2022年度以降年会費	2,261,000
未払金	加盟学協会分担金支出(防災学術連携体年会費)	20,000
合計		2,281,000

正味財産の部 (単位：円)

科 目	摘 要	金 額
名簿作成積立金	名簿作成積立金	0
役員選挙積立金	役員選挙積立金	200,000
INQUA対策積立金	INQUA対策積立金	300,000
予備費積立金	予備費積立金	10,000,000
次期繰越金		21,205,772
	前期繰越金	20,288,031
	当期収支差額	917,741
合計		31,705,772

【資料3】2021年度会計監査報告

日本第四紀学会

会長 鈴木 毅彦 殿


2021年度会計監査報告書

日本第四紀学会2021年度収支決算報告書(2021年8月1日～2022年7月31日)の監査を行い、予算の執行、帳簿、証票の整理等、正常適正に処理されていることを確認いたしました。


ここにご報告いたします。

以上

2022年8月23日

会計監査 三浦英樹 

2022年8月23日

会計監査 横山祐典 

【資料4】顕彰規程等の改訂に関する検討報告

顕彰規程等の見直しを行うため、2021年度に特別委員会、顕彰規程等に関する検討委員会(池原 研委員長、高原 光副委員長、丹羽雄一委員、藤原 治委員、三浦英樹委員、三田村宗樹委員、目代邦康委員、百原 新委員、横山祐典委員)を発足させ、検討を行った。検討委員会では2021年9月26日に第1回オンライン会議を開催し、主たる論点の抽出を行った。その後、整理された7つの論点についてメールベースで審議を行い、とりまとめを行って2022年8月16日に答申が提出された。答申にはさらに既に会員サービス向上検討委員会の答申で指摘されている1項目が追加されている。答申の内容を要約すると以下の通りである。

(1) 各賞の位置付け:学会賞=シニア、学術賞=中堅～シニア、若手学術賞=若手で概ね整理されているが、学会賞・学術賞は現状の通り、年齢制限をすべきではない。論文賞・奨励賞は「第四紀研究」の論文を対象にしている、選考委員会が別であり、前3賞との区別は整理されている。

- (2) 同一者の複数回受賞：学会賞、学術賞は現状同一人物の複数回授与はないが、明文化すべきである。論文賞受賞は同一著者の複数回授与を否定しないが、受賞歴は考慮されるべきである。若手学術賞と奨励賞は、同一人物が同時受賞する可能性があるため、その場合は若手学術賞を優先させることが望ましい。
- (3) 論文賞と奨励賞の違い：若手研究者の論文で重複受賞は問題ない。
- (4) 奨励賞の位置付け：一定のレベル以上を持った論文若手著者の育成と研究奨励に寄与するために与えるという現内規には問題はない。
- (5) 論文賞非会員著者の扱い：現状は会員の著者に与えることになっているが、非会員を含めた著者全員に賞を与えるのが適当と考える。対象は、現状通り著者に会員を含む論文という意見が多数を占めたが、会員が筆頭の論文が本筋という意見もあった。
- (6) 若手学術賞、奨励賞の副賞：現状では現金だが、メダルや楯、ページチャージや別刷り代のクーポン、図書券などの意見があった。若い会員の意見を広く聞いてはどうか。
- (7) 若手学術賞、奨励賞、若手発表賞の対象年齢：若手学術賞は現状の39歳以下、奨励賞と若手発表賞は35歳以下とする意見が多数であった。ただし、将来的には年齢ではなく学位取得後や大学終了後の年数（さらに研究できない期間）の配慮を検討してほしい。
- (8) 会員サービス向上検討委員会の答申ですでに指摘されていることであるが、学会賞、学術賞への推薦数が少なく、その中から受賞候補者を選考せざるを得ない場合の改善策を検討してほしい。
- この答申を受けて、執行部会を中心として2022年度に具体的な規約改訂に向けて作業を進めていく予定である。

【資料5】日本学術会議 INQUA 小委員会報告（委員長：齋藤文紀）

日本学術会議は2020年10月から第25期の3年間となっており、INQUA関係は、国際連携分科会のINQUA小委員会として活動している。昨年の夏以降では、チバニアンが2020年1月にIUGSにおいてGSSPに批准されたことを受けて、2022年5月24日にIUGS分科会と日本学術会議公開シンポジウム「チバニアン、学術的意義とその社会的重要性」を日本第四紀学会ほかと共催し、日本学術会議においてハイブリッドで開催した。同シンポジウムの内容については、「学術の動向」で出版予定である（11月号）。来年7月14日から20日にイタリア、ローマのSapienza大学で開催の第21回国際第四紀学連合(INQUA)ローマ大会2023は、現在2022年11月1日締め切りで要旨の投稿と学生などの参加支援が始まっている。皆さんの参加をお願いしたい。

【資料6】日本第四紀学会 寄付金の取扱い等に関する内規

(2022年8月25日 評議員会にて決定)

- 1 本会に寄付しようとする個人、法人、あるいはその他の任意団体など（以下寄付者とする）は、寄付の目的、寄付者、寄付金の額、また寄付金の運用に当たって条件がある場合にはその内容を明記し、文書にて会長に申し出る。様式は別紙1とする。
- 2 寄付金が次の各号に掲げる基準のいずれかに該当するときは、その寄付金を受け入れることができないものとする。
 - (1) 寄付者に寄付の対価として何らかの利益または便宜を供与することが寄付者側の提示する条件として付されている場合。
 - (2) 寄付金を受け入れることにより、本会の業務、財政、または名誉に負担または支障が生じると認められる場合。
 - (3) その他、寄付金の使途が本会の目的や事業内容および倫理憲章に反するものと判断される場合。
- 3 執行部会は、寄付金の申込受付後、受入れの可否を決定する。
- 4 寄付金の受入れが決定したときは、寄付者に対しその旨を通知する。
- 5 寄付金を受領したときは、寄付金額及びその受領年月日を記載した受領書を寄付者に送付する。様式は別紙2とする。
- 6 寄付金は一般会計の収入として加えるものとする。

7 本内規の変更には、評議員会の承認を必要とする。

8 本内規は、2022年8月25日より施行する。

<別紙1>

年 月 日

寄付金申込書

日本第四紀学会
会長 ○○○○ 殿

氏名 ④
住所
電話番号
E-MAIL

下記のとおり、貴学会に寄付金を寄付いたしたく、ここに申し込みをいたします。

記

1. 寄付金の目的
2. 寄付金の金額
3. 寄付金に係る条件等
4. その他の希望する事項

(注意) 任意団体である本会への寄付金は、寄付金控除の対象とはなりません。

<別紙2>

日本第四紀学会○○○○ - ○号
年 月 日

○○○○ 様

日本第四紀学会
会長 ○○○○

寄付金受領書

下記の金額のとおり寄付金を受領いたしました。

記

受領年月日：
金 額：

(注意) 任意団体である本会への寄付金は、寄付金控除の対象とはなりません。

以上

【資料7】会計年度の区切りを1か月早める提案（会則等改訂案）

説明

最近は大大会・総会が新年度に入ってすぐの8月下旬に行われることがほとんどである。これは、夏休みの間ということと、ほかの学会のイベントが9月などにあるために限定せざるを得ないためである。一

方、会計の収支報告作成は新年度の8月に入ってからでないと無理であり、さらに会計監査はその後になるが、お盆の期間を挟むため、会計監査報告や予算案を含めた会計関係の資料が揃うのが、例年8月下旬となっている。つまり、大会・総会の直前になるまで資料がまとまらないため、評議員会・総会資料を余裕をもって事前に関係者に示すことが難しい。また、2年ごとに役員が交代するが、新役員になってすぐの月末に評議員会・総会が開かれることになるため、十分な準備なしにこれらの会議に対応しなければならない。大会・総会の時期を8月下旬に固定せざるを得ないなら、年度の切り替え時期を1か月早めれば、これらの対応が余裕をもってできることになる。また、これまでの対面式の大会では、評議員会と総会が1日違いで行われていて、評議員会資料と総会資料の特に新年度の計画は同じものが使用されていた。本来なら、評議員会で指摘されたことに基づき、新年度の計画を見直してから総会で提案すべきであると思われるため、評議員会をオンラインで早めに開催できれば、総会資料を修正することも可能となる。このようなことから、年度の切り替え時期を1か月早める提案を行う。

なお、年度の切り替え時期は2023年6月30日/7月1日から適用したい。ただし、現在役員・委員となっていて任期が2023年7月31日までとなっているものについては、2023年6月30日までと自動的に読み替えることとする。また、2022年度は実質11か月間となる。

具体的な規約類の改訂案 下線部は修正または追加部分。

(1) 会則

第11条2

現行 役員の任期は選出された年の8月1日から1期2年とする。

修正案 役員の任期は選出された年の7月1日から1期2年とする。ただし、会計監査は2年目の会計監査報告が終了した時点までとする。

第19条

現行 本会の会計年度は毎年8月1日に始まり、翌年の7月31日に終わる。

修正案 本会の会計年度は毎年7月1日に始まり、翌年の6月30日に終わる。

(2) 領域規程

第13条3

現行 会計委員は毎年6月末日までに各領域の収支を会計委員会に報告しなければならない。

修正案 会計委員は毎年5月末日までに各領域の収支を会計委員会に報告しなければならない。

第14条

現行 領域代表ならびに領域幹事の任期は、選挙が行われた年の8月1日から2年間とする。・・・

修正案 領域代表ならびに領域幹事の任期は、選挙が行われた年の7月1日から2年間とする。・・・

(3) 執行部会規程

第7条

現行 執行部会員の任期は、役員選挙が行われた年の8月1日から2年間とする。・・・

修正案 執行部会員の任期は、役員選挙が行われた年の7月1日から2年間とする。・・・

(4) 常設委員会規程

第5条

現行 委員長及び委員の任期は、役員選挙が行われた年の8月1日から2年間とする。・・・

修正案 委員長及び委員の任期は、役員選挙が行われた年の7月1日から2年間とする。・・・

(5) 学会事務局への業務委託に関する内規

5. 現行 原則として年2回、12月と7月に会員数を確認する。

修正案 原則として年2回、12月と6月に会員数を確認する。

12. 現行 原則として7月に会費納入書類を発送する。・・・

修正案 原則として6月に会費納入書類を発送する。・・・

(6) 会計委員会内規

- 3. 現行 会費は前納のため、請求は年度開始の1ヶ月前(7月)に行う。・・・
修正案 会費は前納のため、請求は年度開始の1ヶ月前(6月)に行う。・・・
- 6. 現行 次年度の予算書原案を作成するため、原則として6月末までに、各常設委員会および領域等から必要経費に関する資料を収集する。
修正案 次年度の予算書原案を作成するため、原則として5月末までに、各常設委員会および領域等から必要経費に関する資料を収集する。
- 14. 現行 原則として6月末に収支状況を取りまとめ、執行部会に報告する。・・・
修正案 原則として5月末に収支状況を取りまとめ、執行部会に報告する。・・・
- 17. 現行 決算書原案を作成するため、原則として当該年度の6月末までに、各常設委員会および領域等から予算執行に関する資料を収集する。
修正案 決算書原案を作成するため、原則として当該年度の5月末までに、各常設委員会および領域等から予算執行に関する資料を収集する。

*なお、各修正規約類の施行時期は2022年9月1日からとする。

【資料8】第四紀通信の年間発行回数および第四紀研究の発行月の改定案

経費削減および編集作業負担軽減のため、第四紀通信の年間発行回数を現行の年6回から年4回に改定したい。

現在、「第四紀通信」は年6回発行(2・4・6・8・10・12月発行)しているのに対して、「第四紀研究」は年4号発行(3・6・9・12月発行)している。これを「第四紀通信」の発行回数を年6回から4回(2・5・8・11月)に改定するとともに、「第四紀研究」の発行月を2・5・8・11月に変更し、「第四紀通信」と「第四紀研究」を合わせてゆうメールで発送することで、年間約22万円の郵送費と発送事務手数料の経費削減を行う。

「第四紀通信」の年4回発行で、対応できない連絡は、学会メーリングリストやHP掲載により適宜連絡を行う。

改定は2023年2月から実施する。

月	現行		改定案		イベント	通信掲載内容
	通信	雑誌	通信	雑誌		
1月						
2月	○		○	○		大会案内(2報) JpGU(2報) 各賞募集案内(再掲)
3月		○				
4月	○					
5月			○	○	JpGU(5月下旬)	大会案内(3報) JpGU(3報)
6月	○	○			各賞決定	
7月						
8月	○		○	○	年大会 (8月下旬~9月上旬)	大会案内(4報) 総会案内 受賞者報告
9月		○				
10月	○					
11月			○	○	各賞募集	大会案内(1報) JpGU(1報) 受賞者の言葉 各賞募集案
12月	○	○				

【資料9】2022年度事業計画

1 庶務委員会

(1) 総会・評議員会・執行部会の開催に関連する業務を行う。

(2) 入会・退会者の確認を行うとともに、会員名簿の管理を行う。

(3) 学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考お

よび論文賞・奨励賞の受賞者選考に関する業務を行う。

(4) 選挙管理委員会をたちあげ、2023-2024 年度役員（会長・副会長・評議員）選挙に関する業務を行う。

(5) 転載許可申請への対応を行う。

(6) 学会・シンポジウム等の共催・後援に関連する業務を行う。

(7) 顕彰規程等の見直しに関する事務的な業務を行う。

(8) その他学会活動に関する庶務業務を行う。

2 会計委員会

(1) 会計に関する承認業務を行う。

(2) 2022 年度総会において、2021 年度の収支決算を報告し、2022 年度の予算案を提案する。

(3) 会計監査を受ける。

(4) 現状の問題点と長期的な財政事情を考慮し、会計の観点から学会の運営を検討する。

(5) 会費のオンライン決済システムを導入する。すでに学会事務局（春恒社）にて提供されている会員マイページに、追加機能としてオンライン決済システムを構築する。2022 年度にはシステム構築にかかる費用 15 万円を計上し、2023 年度以降は年間運用費 45 万円（予定）を支払う。手数料負担のないクレジットカード払いを推奨しオンライン決済の利用を推進する。一方で、一定の移行期間をもうけ、現行の郵便振替を併用する。導入までのスケジュールは、2022 年 8 月に評議員会でマイページ決済システム導入承認、総会で紹介、ML や通信などで 2023 年度から導入が決定した旨を通知、2023 年 4 月にシステム構築等完了（りそなの調整次第）、2023 年 6 月に郵送で 2023 年度年会費の支払い方法を案内（マイページ決済）、振込用紙は同封しない、ML やマイページ内、通信（5 月）などにも掲載、マイページ決済開始（実装）、2023 年 8 月までにマイページ決済が無かった会員に対して郵送で年会費払込票発送、とする。

(6) INQUA ローマ大会への若手派遣費用として総額 100 万円（積立金 30 万円+70 万円）を計上する。本費用の対象者の定義、申請及び審査手順、1 人あたりの補助金額等について執行部会で検討のうえ決定する。

(7) チラシ「第四紀とは」の改訂のために予備費に 20 万円を計上する。

(8) 在庫物品の管理を行う。学会誌は出版から 5 年間は 20 冊を保管し、それ以降は 10 冊のみを保管する。オンラインで公開されていない要旨集を PDF 化し、各号 10 冊のみを保管する。

3 編集委員会

(1) 「第四紀研究」第 61 巻第 3 号、4 号、第 62 巻第 1 号、2 号を編集し、定期刊行する。また、J-STAGE を通じて電子ジャーナルとしての刊行を行う。必要に応じて、電子付録を学会ホームページと J-STAGE data で公開する。

(2) 「第四紀研究」編集・出版に関わる諸課題を整理し、順次その検討・見直しを進め、可能なものから改善を実施する。

4 広報委員会

(1) 「第四紀通信」第 29 巻 5 号、6 号、第 30 巻 1 号、2 号を編集し、発行する。

(2) 上記「第四紀通信」各号の電子版（PDF 版）を、それぞれ発行前月の下旬に日本第四紀学会ホームページに掲載する。各ファイルを保存し、アーカイブ化を継続する。

(3) 日本第四紀学会ホームページを管理し、広報、情報提供、アウトリーチ活動等を行う。

(4) 日本第四紀学会会員メーリングリストを通じて各種情報提供等を行う。

(5) 各委員会および各領域のメーリングリストの管理を行う。

5 行事委員会

(1) 日本第四紀学会 2022 年大会を 2022 年 8 月 26 日（金）～ 28 日（日）に、静岡県地震防災センターで開催する。

(2) 2023 年大会（会場は埼玉の予定）の準備を関係者と調整して行う。

(3) 学会賞・学術賞受賞記念講演会を開催する。

6 渉外委員会

(1) 日本地球惑星科学連合において日本第四紀学会の活動を高めるために、2023 年大会（2023 年 5 月 21 日～ 25 日）においても、『第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス』と、『活断層と古地震』を第四紀学会としてセッション提案及び開催し、第四紀学会員の発表の場を用意するとともに、第四紀学に関連するセッションとの連携・共催を積極的にすすめる。

(2) 防災学術連携体が主催するシンポジウムや企画に対して、日本第四紀学会としてのプレゼンスを高めるために積極的に参画する。

(3) 自然史学会連合、地学オリンピック、ジオパーク学術支援連合等、国内関連学協会との連携を高めていく。

(4) 学会設立 70 周年（2026 年）に関連する出版計画を進める。

7 領域 1 「気候変動及び海洋の諸プロセス」

- (1) 気候変動及び海洋の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
 (2) JpGU2023 において、関連セッションを開催する。

8 領域 2 「陸上の諸プロセス」

- (1) 陸上の諸プロセスに関するシンポジウムや巡検を企画・開催する。
 (2) 次年度の JpGU 大会に向けて、陸上の諸プロセスに関連したセッションの提案を検討する。
 (3) INQUA TERPRO コミッションの研究プロジェクトに領域メンバーの参加をうながす。

9 領域 3 「層序と年代基準」

- (1) 層序と年代基準に関するシンポジウムを企画・

開催する。

10 領域 4 「人類と生物圏」

- (1) 2023 年 3 月 5 日（日）に、國學院大學にて、公開シンポジウム「縄文時代早期人とその生態—群馬県居家以岩陰遺跡を中心に—（仮）」をハイブリッド形式で行う。

11 領域 5 「現代社会に関わる第四紀学」

- (1) 現代社会に関わる第四紀学に関するテーマでの、シンポジウムあるいは講演会等について、具体的な内容を決定し、実施する。
 (2) 本学会のパンフレットについて、今後、新しく加えるべき知見についての執筆者を選定、執筆依頼、編集、デザインのリニューアル等をすすめ、新パンフレットを作成する。

【資料 10】 2022 年度予算案（P27 参照）**【資料 11】 2021-2022 年度役員・委員会委員等一覧（未確定の一部を除く）**

会 長 鈴木毅彦

副会長 北村晃寿 須貝俊彦

会計監査 三浦英樹 横山祐典

領域 1 領域代表 田村 亨

領域幹事 オブラクタ スティーブン フィリップ、久保田好美、加 三千宣、坂下 涉、平林 頌子

領域 2 領域代表 堀 和明

領域幹事 吾妻 崇、石村大輔、奥野 充、荻谷愛彦、久保純子、佐藤善輝、穴倉正展、丹羽 雄一、藤原 治

領域 3 領域代表 卜部厚志

領域幹事 青木かおり、岡田 誠、菅沼悠介、長橋良隆、兵頭政幸、水野清秀

領域 4 領域代表 海部陽介

領域幹事 井上 淳、江口誠一、工藤雄一郎、齋藤めぐみ、高原 光、中塚 武、那須浩郎、百原 新

領域 5 領域代表 目代邦康

領域幹事 石原与四郎、植木岳雪、小荒井 衛、前杵英明、三田村宗樹、山田和芳

庶務委員会 委員長 水野清秀

委 員 谷川晃一朗、佐藤善輝、西澤文勝、江口誠一、前杵英明

会計委員会 委員長 齋藤めぐみ

委 員 坂下 涉、石村大輔、立石 良、植木岳雪

編集委員会 委員長 荻谷愛彦

委 員 加 三千宣、青木かおり、下岡順直、安江健一、松多信尚、井上 淳、亀井 翼、石原与四郎

- 広報委員会 委員長 那須浩郎
委員 丹羽雄一、竹下欣宏、オブラクタ スティーブン フィリップ、小森次郎
- 行事委員会 委員長 工藤雄一郎
委員 池原 実、箱崎真隆、奥野 充、目代邦康
- 渉外委員会 委員長 山田和芳 (JpGU プログラム)
委員 平林頌子 (JpGU 環境災害対応委員：環境)、
卜部厚志 (JpGU 環境災害対応委員：災害)、
百原 新 (自然史学会連合)、
小荒井 衛 (JpGU プログラム、防災学術連携体)、
小森次郎 (地学オリンピック)、
植木岳雪 (ジオパーク)
- オンライン委員会 委員長 久保田好美
委員 吾妻 崇、菅沼悠介、工藤雄一郎、目代邦康
- 2022 年度評議員会議長 久保純子
2022 年度評議員会議長代理 岡田 誠
-

【資料 10】2022 年度予算案

2022年度予算案
(2022年8月1日～2023年6月30日)

収入の部

科 目	2021年度予算額	7月31日現在	2022年度予算案	備 考
会費収入	8,772,000	8,565,644	8,328,000	正会員897名、学生会員11名、賛助9社（2022年8月1日現在）
正会員会費収入	8,572,000	8,365,644	8,128,000	
賛助会員会費収入	200,000	200,000	200,000	20,000円×9社（10口）
誌代	700,000	504,064	600,000	定期雑誌購入、Back No
別刷代・超過頁代収入	250,000	416,550	250,000	第四紀研究 61巻3号～4号、62巻1号～2号別刷代等
雑収入	150,000	791,111	150,000	JST、著作権料収入等
利子収入	1,000	296	1,000	預金利息
広告料収入	0	0	0	大会予稿集広告掲載料（2022年大会分無し）
役員選挙積立金取崩収入	0	0	200,000	2023年度役員選挙
INQUA対策積立金取崩収入	0	0	300,000	INQUAローマ大会
名簿作成積立金取崩収入	150,000	150,000	0	
予備費積立金取崩収入	0	0	0	
収入合計	10,023,000	10,427,665	9,829,000	
前期繰越金	20,288,031	20,288,031	21,205,772	
合計	30,311,031	30,715,696	31,034,772	

支出の部

科 目	2021年度予算額	7月31日現在	2022年度予算案	備 考
会誌発行費	3,101,200	3,329,405	3,101,200	
印刷費	1,500,000	1,603,360	1,500,000	第四紀研究 61巻3号～4号、62巻1号～2号 各1,200部
編集費	300,000	453,235	300,000	
編集人件費	1,201,200	1,201,200	1,201,200	編集書記手当
別刷印刷費	100,000	71,610	100,000	
会誌・会報発送費	600,000	621,883	700,000	
会報発行費	785,000	728,461	785,000	
印刷費	500,000	478,830	500,000	第四紀通信 29巻4号～6号、30巻1～2号 各1,100部
編集費	75,000	72,831	75,000	編集ソフト製約料等
編集人件費	210,000	176,800	210,000	第四紀通信編集アルバイト代
学会HP運営費	170,000	89,820	170,000	HP更新アルバイト代、ドメイン更新料等
大会運営準備金	390,000	220,000	390,000	2023年大会運営準備金
巡検準備金	100,000	0	100,000	2023年大会
講演会・シンポジウム費	50,000	0	50,000	シンポジウム・受賞記念講演会開催費
予稿集印刷費	0	0	0	2022年大会一印刷等なし
学会賞等顕彰費	320,000	294,754	350,000	賞状作成費・副賞等
会議費	60,000	25,442	60,000	ZOOMライセンス利用代、会議室使用代
通信費	390,000	175,221	390,000	会費請求書発送郵税、事務通信費等
旅費・交通費	100,000	3,458	100,000	旅行協会・委員会等交通費
印刷費	350,000	261,317	350,000	学会専用封筒、コピー代等
業務委託費	2,400,000	2,261,903	2,550,000	事務委託費 マイページ決済構築費用（15万円） （2023年度開始予定、運用費は2023年度から）
領域活動費	750,000	0	750,000	15万円×5領域
領域1	150,000	0	150,000	
領域2	150,000	0	150,000	
領域3	150,000	0	150,000	
領域4	150,000	0	150,000	
領域5	150,000	0	150,000	
INQUA対策費	0	0	1,000,000	INQUAローマ大会（2023年）若手派遣費用等
役員選挙費	0	0	400,000	2023年度役員選挙
名簿作成費	—	—	—	
INQUA対策積立金繰入支出	0	0	0	
役員選挙積立金繰入支出	200,000	200,000	0	
名簿作成積立金繰入支出	—	—	—	
予備費積立金繰入支出	1,200,000	1,200,000	0	
加盟学協会分担金支出	50,000	30,000	50,000	地球惑星科学連合、自然史学会連合分担金、防災学術連携体
国際科学技術コンテスト協賛金支出	50,000	50,000	50,000	国際地学オリンピック協賛金
雑費	50,000	18,260	50,000	
予備費	0	0	200,000	第四紀チラシ改訂費用
支出合計	11,096,200	9,509,924	11,576,200	
次期繰越金	19,214,831	21,205,772	19,458,572	
合計	30,311,031	30,715,696	31,034,772	

◆日本第四紀学会 2022 年度第 1 回執行部会議事録

日 時：2022 年 8 月 1 日（月）9:00～12:00

方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議

出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、
須貝俊彦（副会長）、水野清秀（庶務）、
苅谷愛彦（編集）、工藤雄一郎（行事）、
山田和芳（渉外）、田村 亨（領域 1）、
堀 和明（領域 2）、目代邦康（領域 5）

欠席者：齋藤めぐみ（会計）、那須浩郎（広報）、
卜部厚志（領域 3）、海部陽介（領域 4）

オブザーバー出席：永峯菜穂子（事務局）

主な報告事項

(1) 学会賞、論文賞、功労賞等の受賞者に対して連絡を行い、表彰式の参加予定と受賞理由に間違いがないか等の確認を行った。

(2) 会費のオンライン決済導入についての費用やスケジュールについて検討を行った。

(3) 2022 年 8 月 1 日現在、「第四紀研究」通常号の受理済み原稿（書評を除く）は 6 編（61 巻 3 号以降に掲載予定）、審査中 9 編である。特集号については審査中が合計 8 編である。

(4) 2022 年大会でのスケジュールについて、総会時間を増やすなど、多少の変更を行った。また、ふじのくに地球環境史ミュージアムに共催申請書を提出した。

(5) 2022 年 10 月 22～23 日に開催されるぼうさ

いこくたい 2022 神戸のシンポジウムにおいて、日本古生物学会との合同提案として、北村副会長に「熱海の盛土崩落の原因に関する地球科学的研究」という題目で講演してもらうことにした。

主な審議事項

(1) 会計年度の区切りを 1 か月早める会則等の改訂案を検討し、評議員会、総会で提案することにした。

(2) 寄付金の取り扱い等に関する内規の修正案を検討し、評議員会で提案することにした。

(3) 会費のオンライン決済システム導入、INQUA2023 への若手参加支援、リーフレット「第四紀とは」改訂などを含めた 2022 年度会計予算案について検討した。

(4) 「書評」の見出しを「第四紀研究」冊子体表紙および学会ホームページに掲載することにした。

(5) 「第四紀通信」を「第四紀研究」と同時発行にして年間 4 回にする案について検討した。評議員会までに案をまとめ、提案することにした。

(6) 大会での発表者が新型コロナ陽性者または濃厚接触者となって出席できない場合、発表動画を事前に提出してもらい、会場で流すことにした。

(7) 評議員会・総会の担当者、議題、資料の提出期限などについて確認した。

★★★ 第四紀学会に情報をお寄せください ★★★

日本第四紀学会では、第四紀通信のほか、メーリングリスト (ML)、ホームページ (HP) を用いて情報発信をしております。メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス ([jaqua-koho\(at\)quaternary.jp](mailto:jaqua-koho(at)quaternary.jp)) へご投稿ください。

情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。ML へのご投稿についての詳細は、第四紀通信 29 巻 4 号の巻末をご覧ください（下記の通り HP でも閲覧可能です）。第四紀通信には主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報を、HP には主催・後援イベントなどのほか「公募・助成」情報等を掲載します。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。

第四紀通信は偶数月 1 日刊行予定としていますが、奇数月下旬には版下を HP (<http://quaternary.jp/>) にアップしていますのでご利用ください。

日本第四紀学会広報委員会

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : [daiyonki\(at\)shunkosha.com](mailto:daiyonki(at)shunkosha.com) 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176